# 『シンナ』

村 瀬 延 哉

## (1)

『シンナ』はコルネーユ四大悲劇の一つであり，その輝かしい成功は，作者自身が証言している。

> Ce poème a tant d'illustres suffrages qui lui donnent le premier rang parmi les miens, que je me ferais trop d'importants ennemis si j'en disais du mal:[1)]
>
> (多数のすぐれた方々が，この劇を私の作品のうちで最上のものとされているので，私がこれを悪く言えば余りにも多くの強力な敵を作ることになるでしょう。)

ところで，ベニシュウも言う通り，コルネーユの作品中この悲劇ほど，書かれた時代の政治背景と切り離して考えられないものはない。[2)]従って我々はまず，『シンナ』創作に影響を与えた可能性のある当時の事件を仔細に検討する。次に，初版の副題に「オーギュストの寛容」とあったことでも分かるように，悲劇のやま場をなす最終場面の皇帝の行為をいかに理解すべきか，最初に検討した政治的背景と関連づけながら明らかにしたい。

## (2)

『シンナ』の初演がいつかは定かでない。ただ1964年にパンタールが，『シンナとポリュークトをめぐって』で1642年を唱えてから，この説が有力になっている。主張の根拠はコンデ公の侍医 Pierre Bourdelot が，ローマの友人でプーサンの保護者でもあった Cassiano dal Pozzo にあてた1642年9月12日付の手紙である。そこでは「コルネーユなる人物」がつい最近作った悲劇『シンナまたはオーギュストの寛容』が称賛されている。[3)]当時 Bourdelot は，コンデ公の侍医の地位に必ずしも満足しておらず，Dal

Pozzo を通して，ローマ法皇 Urbain Ⅷの甥で枢機卿 Francesco Barberini に近づこうとしていた。Dal Pozzo との通信では，医学，博物学などの最新情報を伝えながら，自己能力をアピールする目的があったようだ。書籍，文学のニュースも定期的に書き送っていた。彼はまたガッサンディ等の友人であり，パリで起こる文学上の出来事にも通じていたらしい。

このような事情から，Bourdelot の書簡の信頼性は高いと考えられる。[4)]

一方，『シンナ』の初演が41年以前であるという説の根拠は，コルネーユの友人の一人メナージュがラテン語で書いた追悼演説詩（＝Epicedium）にある。詩中コルネーユは，婚礼当日に肺炎で死んだことになっており，故人をいたんで，彼を有名ならしめた作品の主人公達が集う：『メデ』，『ル・シッド』，『オラース』および『シンナ』の登場人物である：コルネーユがいつ結婚したかは分かっていない。ただ，彼が自分の結婚生活について触れてた Goujon への手紙が41年７月１日付であることと，長女マリーが42年１月に誕生していることから，おそらく41年５月以前で，40年末から41年初めだろうと推察できる。メナージュの詩が公にされたのは1652年であるが，実際の製作年代はこれも明らかでない。しかしこの詩全体が，コルネーユがルーアンで逝去したという噂が流れた直後に作られたとは考えにくい。パンタールは，その根拠として次の二点を挙げている：

詩の中に，アポロン等とならぶ詩人の保護者として Jérôme Bignon の名があがっている。彼は清廉潔白，博識で聞こえており，大評法院，高等法院の検事（＝avocat général）を務めた。かねてから彼の立場はリシュリユーの政策と齟齬をきたしていたが，ヴァンセンヌに投獄されたサン＝シランの擁護を行った39年初めに対立が激化，41年には職を辞することになる。このような時期に Bignon を称賛する詩を作って，時の権力者に逆らう危険を犯すだろうか。これが第一点である。

第二に，コルネーユを欠いてモンドリーは今後どんな役柄で活躍すればよいのかと，詩中で問われている。周知の通りモンドリーは，37年８月卒中の発作に倒れる。この後必死の努力にもかかわらず，はかばかしい回復が見られず，40年初めシャプランが舞台復帰の望みなしと断定する。こうしたタイミングにモンドリーの活躍を期待するが如き文句を挟むことが，いかに不自然，非礼な行いであるか明白であろう。

結局メナージュの詩は，異なった時期に書かれたものを寄せ集めた可能性が高く，『シンナ』に関する部分も後から挿入されたのであろう。ある

いは曖昧な記憶を頼りに，後年，コルネーユをめぐるエピソードを年代順に綴ったとも考えられるが，いずれにしろ，Bourdelot の書簡に比較すればメナージュの証言の信憑性は低い。当時，生存している人物の死を仮定して追悼詩を作った例は他にもあり，メナージュも詩才を誇示するためにこうした誘惑にかられたのであろう。[5)]

以上がパンタールの結論である。

この結果，『シンナ』は1642年7月末から8月初めにかけて，マレー座で初演されたというのが，目下の有力な見解である。

## (3)

『シンナ』の出典は作者が示している。初版の巻頭にセネカの『寛容論』（I，9）の原文と，これを敷衍したモンテーニュの『エッセー』（I，23）が掲げられていた。さらにオーギュストがシンナとマクシムに退位の是非を問う二幕一場は，三世紀のギリシア史家カッシウス・ディオの『ローマ史』で，同皇帝が腹心の Agrippa と Mécène に助言を求める場面を参照したとみられる。上記以外にも，コルネーユと同時代あるいはそれ以前に書かれた作品で，たとえばバルザックの『君主論』のような政治・政体論とか，『シンナ』と同様のテーマを扱ったスキュデリーの『セザールの死』などの悲劇が，間接的影響を及ぼしたことは十分想像できる。

しかし，『シンナ』製作の動機を探る上で，最も興味をそそるのは，当時頻発した貴族によるリシュリユー打倒の陰謀や，戦費捻出のための重税化政策に対する民衆の反乱である。

後者で注目すべきは，39年7月バス＝ノルマンディ地方に発生した「裸足の乱」（＝révolte des Va-Nu-Pieds）である。アヴランシュ，クータンスなどの農民が塩税の新設に反対して一揆を起こした。同年8月ルーアンでも，手工業者が織物と染色に対する課税に抗議して暴動を起こす。下層の聖職者，貴族が一揆に加わって指導的役割を果たし，主として徴税官の館が略奪，殺戮の対象となった。バリケードも築かれる。これに対し争乱を鎮めるべき地方当局は，概して消極的な，暴動に同情的とも思える対応に終始した。ルーアンの場合で言えば，高等法院長の要請に従い，塩税総徴税官（＝receveur général des gabelles）Nicolas Le Tellier の屋敷が放火略奪にあった直後，武装した市民が暴徒の鎮圧にあたる。男女30名ほどが8月23日に殺害されるのである。しかし鎮圧行動は，徴税官邸の襲撃が

終わるまで故意に延ばされたふしがある。徴税官への憎しみという点では，両者の感情は一致していた。さらに23日の殺戮で刑罰は十分達せられたと考えたのか，高等法院は逮捕した叛徒を釈放してしまう。こうした挙は，かねて不穏な動きのあるロングヴィル公を総督にいただき，地理的にもイギリスの干渉を受け易いノルマンディの事情を考慮すれば，当然リシュリユーの懸念と怒りをかきたてた。11月になるとリシュリユーは，ガッシヨンひきいる精鋭部隊を投入し，「裸足の乱」を一気に瓦解させる。ついで12月末，ガッシヨンがルーアンを占領する。直後にルーアン入りした大法宮セギエは新年早々苛酷な報復を開始。一揆の首謀者達を正規の裁判にかけることなく処刑すると共に，鎮圧にあたって優柔不断な態度をとった高等法院，租税法院を職権停止。またルーアン市から都市の自治権を剝奪する。セギエは市庁舎とり壊しまで考えたが，さすがにこれはリシュリユーが許さなかった。[6)]

逮捕されたルーアン住民のうち二十数名が永久追放の処分を受けたらしく，マルティ＝ラヴォーは次のように述べている。

> En sa qualité d'avocat aux siéges généraux de l'amirauté, Corneille faisait partie du parlement; il comptait parmi les proscrits, des amis, des parents peut-être, et devait avoir à cœur de calmer les ressentiments de Richelieu.[7)]
>
> (海事審判所主任監督官の肩書を持つコルネーユは高等法院の一員であった。追放者の中には友人や縁者の名が多分あった。コルネーユはリシュリユーの怨念を鎮めたいと願ったに違いない。)

このように，39年から40年にかけてルーアンで起こった事件が，コルネーユに強い印象を残したことは想像に難くない。もともと民衆の貧しさから生まれた一揆が，中央政府の強権発動を誘い，彼の身近にいる人々までが悲惨な体験を余儀なくされた。叛徒の残酷な処刑が執行されたのも，彼が住むド・ラ・ピ街からほど遠くなかった。

しかし，こうした事実から『シンナ』が，リシュリユーの寛容政策を乞うために書かれたと結論するのは早計であろう。特に悲劇の初演がマルティ＝ラヴォーが推測した40年でなく，42年夏の公算が高いことを考慮すればなおさらである。後日「フロンドの乱」の折，コルネーユがとった立場から見ても，彼は本来絶対王制の支持者と考えられる。さらに一介の文学者，官僚にすぎないコルネーユが，大胆にも時の最高権力者の政策を批

判し，諫言を呈したと想像できるだろうか。結局，一揆とセギエの弾圧の記憶が詩句の一端に顔をのぞかせることはあっても，事件が製作の直接の契機になったとは思えない。

リシュリユーは，国務会議の一員となった1624年から，世を去る42年まで，ルイ十三世の固い信頼をバックに，絶対王政の確立と王国の隆盛に邁進する。この時代は同時に，彼の暗殺を企む貴族達の陰謀の歴史でもある。陰謀の背後には，ほとんど常に国弟ガストン・ドルレアンの姿が見られる。ま謀叛人達は必要とあらば，リシュリユーが王国に対する最大の脅威とみなしていたハプスブルク家，およびその他の外国勢力と手を結ぶのを厭わなかった。

以下『シンナ』製作に影響を及ぼした可能性のある事件を列挙してみよう。まず26年のシャレー伯の陰謀。事件のきっかけは，ガストン・ドルレアンとマリー・ド・ブルボン・モンパンシェの婚姻である。母后マリー・ド・メディシスは，ガストン・ドルレアンの次兄が死亡した1611年に二人の結婚を決めていた。しかし国王との間に子供がなかったアンヌ・ドートリッシュは，王位継承権を持つ王弟の婚姻に反対であった。ここで王妃の親友で希代の陰謀家シュヴルーズ公夫人の暗躍が始まる。彼女は王弟の養育係ジャン＝バチスト・ドルナノを誘って結婚の妨害を計るが，彼は逮捕される。彼女は若いシャレー伯にも触手を動かす。シュヴルーズ夫人の愛人となった伯爵は，ガストン・ドルレアンを首領とするリシュリユー打倒の反乱を画策する。だが，シャレーの友人 Louvigny 伯の密告によって，国王の知るところとなり斬首の刑に処される。彼の処刑のエピソードはよく知られている。急造の死刑執行人であったため，首を落とすのに三十数回も刃をふるわねばならず，最後は樽職人などが使う手斧に頼った。二十回目に及んでも伯爵は絶命しておらず，あえぎながら神に祈りをささげていた。[8)]

確かに恋情を餌にして陰謀に巻きこんでいくシュヴルーズ夫人の遣口は，エミリーとシンナの関係に通じるものがあるし，マクシムに該当する Louvigny 伯のような裏切者も登場する。また最初シャレーが陰謀を密告した時，リシュリユーはこの件で何人も罪に問われぬと約束した。[9)] しかし事件全体が与える印象は，「オーギュストの寛容」とかなり異なる。ガストン・ドルレアンやシュヴルーズ夫人といった首謀者が血統，家柄からして厳罰に処すことができなかったため，[10)] シャレー伯の処刑はみせしめ

としての仮借のない性格を帯びることになる。オルナノ元帥も獄死している。しかも，『シンナ』との関連を問うには余りにも遠い過去，初演より16年も前の出来事であった。

悲劇の製作と時期的に近い事件を探すとすれば，42年に発覚したサン＝マールの陰謀が思い浮かぶであろう。ルイ十三世の側近で主馬頭（＝grand écuyer）の職にあった美青年サン＝マールは，当時王の寵愛を一身に受けていた。国王のリシュリユーへの信頼が薄れつつあると判断したサン＝マールは，王弟やブイヨン公とはかって枢機卿暗殺の機会をうかがう。また軍隊の支援を得るために，スペイン政府と密約をとり交わす。しかし謀叛人の間で意志の疎通を欠いたこともあり，計画は容易に進展しない。そのうち密約書の存在が枢機卿に知れてしまう。ルイ十三世は止むなく寵臣サン＝マールの逮捕を認める。これが6月中旬のことである。7月になって罪を免れようと，ガストン・ドルレアンが洗いざらい自白する。もはやサン＝マールの罪状は否認し難い。丁度この時期が『シンナ』初演の直前となる。結局サン＝マールは友人 Thou と共に，9月にリヨンで処刑される。

部分的類似はともかく，この事件がリシュリユー時代の他の陰謀に比して，とりたてて『シンナ』と共通点に富むとは言えない。さらに，サン＝マールの陰謀は40年頃から進行していたと推測されるが，コルネーユの耳に噂が届いたと思われる42年7月頃，『シンナ』はほぼ完成していたはずである。謀叛人達を弁護する立場にないコルネーユが，あわてて改作したとは考えられない。従って両者の間に直接的関係はないと結論せざるをえない。

パンタールは，オーギュストの寛容を連想させ，しかも年代的に悲劇の製作に影響を与える可能性のあった二つの事件を挙げている。

第一はソワッソン伯の反乱である。伯爵は36年リシュリユー暗殺を計って失敗し，スダン（＝Sedan）に逃れてブイヨン公にかくまわれていた。この後スペインの助けを借りた伯爵は，ブイヨン公などと共に再びリシュリユー打倒の兵を挙げる。こうして41年7月6日 La Marfée の森の近くで，フランス国王軍と交戦する。戦闘は反乱軍の勝利に終わった。しかし同時に伯爵の戦死という予期せぬ事態が生じる。[11]意気消沈したブイヨン公は国王と和平交渉に入る。彼はソワッソンの遺体が不名誉な扱いを受けずに，フランス国内のしかるべき墓所に葬られるよう要求する。ここで頑

なに要求を拒む王を宥めたのがリシュリユーである。枢機卿はまた，ブイヨンを始めとする敵将達を実質的に罰することなく寛大な条件で和平を実現させる。[12)]

第二はルイ十三世の腹違いの兄弟ヴァンドーム公にまつわる事件。彼はシャレー伯の陰謀に連座して，1630年までヴァンセンヌに幽閉されていた。その彼にリシュリユー暗殺計画の嫌疑がかかる。暗殺を依頼されたという証人が現れた。40年末から41年初めのことであった。無実を証明するのは不可能と判断したのであろう。ヴァンドームはイギリスに逃れる。こうして被疑者不在のまま，国王主宰の裁判が行われる。しかしこの異例の裁判は，41年5月17日の開廷中，リシュリユーがセギエに託した書簡によって中止される。枢機卿はヴァンドームが邪しまな考えを抱いたとしても，その罪を許すよう王に願っている。

もちろんこうした事件は，寛容を示すことでリシュリユーの政策に実害をもたらす恐れが少ない。逆に人気上昇に役立つから，一種のスタンドプレーと言えよう。だがともかく，41年という寛容なリシュリユーの一面がのぞいた例外的な年に，『シンナ』が書かれた確率が高い。特にヴァンドーム公については，コルネーユと個人的なつながりがあり，事件の推移に作者が強い関心を持っていた可能性がある。[13)]

要するにパンタールによれば，『シンナ』はオーギュストの寛容をリシュリユーの寛容に二重写しにしながら，つまり，枢機卿へ讃辞を呈する形で書かれた。だが42年の上演は，サン＝マールの処刑という強権発動時期と重なって，皮肉な結果に終わる。[14)]

以上の検討の結果言えるのは，『シンナ』が驚くほど時事性を備えたタイムリーな作品だという点であろう。確かに同時代の具体的なある事件が，悲劇の構想に結びついた，あるいは製作に直接の影響を与えたと指摘することはできないかもしれない。しかしこの悲劇は，当時リシュリユーに対してめぐらされた陰謀の特徴を見事にとらえて再現している。謀叛に隠然たる影響力を行使する女性達。陰謀の組織が拡大すれば必ず起こる密告，裏切。表向き立派な大義をかざそうとも，謀叛人達の胸中には異なった利害，思惑が潜んでいて，それが計画の失敗につながること等。さらにこのような政治情況を踏まえて，『シンナ』で語られる政治談義，治政における寛容さの役割等が，人々の念頭に真剣な検討課題として存在しえたことも想像に難くない。

その証拠が，Campion 兄弟およびその家族，友人が形作った十数人の小サークルの記録である。この記録は1704年パリで刊行され，11の対話からなっている。11のうち3編が政治に関するもので，1642年以前多分41年頃のものだろうと推測できる。[15]たとえばリシュリユーの治政を念頭においた『第九の対話』では，専制政治の性格について長々と議論した後，専制政治の最良の理論家マキァヴェリは，モラルの点からだけでなく政治的効果の点からも断罪されねばならない，恐怖に基づく政体はすべて失敗せざるをえないからと，結論している。[16]

サークルの中心人物 Alexandre de Campion は，先に述べたソワッソン伯の重臣でガストン・ドルレアン，リシュリユー等との折衝にもあたった。[17]伯爵が戦死した後はヴァンドーム公に仕えている。弟の Henri de Campion もヴァンドーム公の子息ボーフォール公に仕える。彼らはヴァンドーム公らがイギリスに亡命した時，同様にイギリスに渡った。[18]もう一人の弟 Nicolas de Campion は聖職者であった。従ってこうした政争の波乱に巻きこまれることなく，ルーアン近郊にとどまって，サークルで交わされた対話，討論を書き残したのは彼だと考えられる。[19]

1857年に出版された Henri de Campion の『回想録』（＝《Mémoires》）にはコルネーユについて興味深い記述がある。コルネーユは，リシュリユーの意向で作られた「五人の有名詩人」の一人として，1635年初演の『テュイルリー宮の喜劇』などを合作した。Ezicrate（＝『対話』中の Alexandre de Campion の偽名）は，やがて五人組から排除されたコルネーユを，「我々の友であるこの詩人」（＝《ce poète notre ami》）と呼んでいる。《notre ami》という表現を文字通りにとって，コルネーユと Campion 家の間に親交があったとするか，[20]単なる修辞とみなすか，[21]見解の別れるところであろう。しかしいずれにしろ，『シンナ』が書かれている頃，地理的にも作者のすぐ側に，彼と同じ問題意識を持った人々が生きていたことは，否定の余地のない事実である。

なおジャザンスキィは，『シンナ』製作に影響を与えたものとして，既に出典として挙げた書物，詳述した歴史的事件の外に，作者自身の心理状態を考慮している。所謂「ル・シッド論争」によって，彼は，次元は全く異なるけれど，権力の頂点に立ったオーギュストが味わった孤独と幻滅に相通じる心理的体験をしたのではないかというのである。[22]傾聴すべき意見であろう。

(4)

我々は以上，主として「シンナ」と史実のかかわりを明らかにすることで，政治劇としての側面を強調できたと思う。しかし言うまでもなく，「シンナ」の価値は単なる史実との符号によるわけではない。今日の読者にとって，劇的感動がなにより最終幕のオーギュストの寛容によってもたらされることに異論の余地がない。そして謀叛人の免罪は，政治的意義と同時に，当然純粋に人間的な美徳の発露という面を持つ。そこから対照的な見方が生まれるのである。

第一は，最初の点にだけ注目した，つまり政治的効果を狙った偽善だという解釈である。コルネーユ劇を愛好したナポレオンは，主人公が突然高邁な皇帝に変身する結末に釈然としないものを感じていた。しかし Monvel 演じるオーギュスト を見てようやく納得する。

> Une fois, Monvel, en jouant devant moi, m'a dévoilé le mystère de cette grande conception, Il prononça le *Soyons amis, Cinna*, d'un ton si habile et si rusé, que je compris que cette action n'était que la feinte d'un tyran, et j'ai approuvé comme calcul ce qui me semblait puéril comme sentiment.[23)]
>
> (いつかモンヴェルが私の前で演じてみせた時，この偉大なる創作の秘密が明らかになった。彼は「シンナよ，友人になろう」という台詞を非常に抜け目のない狡猾な調子で喋ったから，私はこの行為が専制君主の欺瞞にすぎぬことを理解した。そして子供じみた感情と思えたものも策略ならば是認できたのである。)

これに対しランソンは，帝位にありながら地位故に孤独と不安にさいなまれるオーギュストが，安定し満ち足りた自己をとり戻すための手段として，彼の寛容を捉えている。

> Il voit plus de grandeur à vaincre en soi la volonté de punir qu'à punir en effet. Il pardonne, quoi qu'il en doive advenir: il a mis son bonheur à ne dépendre que de soi en se rendant maître de soi.[24)]
>
> (彼は実際に罰するより，自分の内にある罰したいという意志に打ち勝つ方がより偉大であると知った。彼は結果を思い煩うことなく，罪を許す。自己を完全にコントロールし，自分にしか左右されないことこそ幸福だと考えたからである。)

従って四幕三場で作者が，史実に従って，悩めるオーギュストに向かいリヴィーに言わせた忠告，

Après avoir en vain puni leur insolence, / Essayez sur Cinna ce que peut la clémence,[25)]

（彼らの思い上がりに罰を下しても効果がなかったからには，シンナには寛大さによって何ができるかを試してごらんなさい。）

寛容を政略として用いよというこの忠告を，ランソンは皇帝が軽蔑を交えて拒絶したととる。確かに彼の見方は，平均的読者の心情をよく表現している。あらゆる打算を捨て，皇帝たらんとする野心も暗殺の危険ものともせず，純粋に心底から湧き上がってくる寛容，和解の気持ちに身を任ねたからこそ，オーギュストの行為は感動を呼ぶのだと。もっともナポレオンは，それを「子供じみた」と形容した。

問題の四幕三場について，ヴォルテールが興味深い記述を残している。

On a retranché toute cette scène au théâtre depuis environ trente ans. 〔....〕 Le conseil que Livie donne à Auguste est rapporté dans l'histoire; mais il fait un très mauvais effet dans la tragédie. Il ôte à Auguste la gloire de prendre de lui-même un parti généreux. Auguste répond à Livie: *Vous m'aviez bien promis des conseils d'une femme; Vous me tenez parole*: et après ces vers comiques, il suit ces mêmes conseils. Cette conduite l'avilit. On a donc eu raison de retrancher tout le rôle de Livie, comme celui de l'infante dans le *Cid*.[26)]

（およそ30年ほど前から，この場面は劇から削除された。〔……〕リヴィーがオーギュストに与える忠告は歴史に伝えられているが，悲劇では非常に悪い効果を生むからだ。それは自らの意志で高邁な決断をする栄誉を，オーギュストから奪う。オーギュストはリヴィーに，「お前は私に女の意見を言うと約束した。いかにも約束通りだ。」と答える。この喜劇風の台詞の後で，彼はまさしくその意見に従うのである。この行為は彼を卑しめる。従って『ル・シッド』の王女の役割と同様，リヴィーの役柄をカットするのは道理に適ったことであった。）

つまり，その後の展開を考慮すれば，オーギュストが本当に妻の忠告を無視したかどうか疑わしい，むしろ尊重したとする方が不自然でないこと

を，ヴォルテールの文章は暗示している。

もちろん，ナポレオンの判断にも承服し難い。五幕のシンナとの会談前に，オーギュストは彼の裏切を知っていた。しかし陰謀にエミリーが加担していたことや，マクシムが密告におよんだのは忠誠心からではなく三角関係のもつれからだったと知るのは，その後のことである。彼の最終決断，あの名高い台詞，

> Je suis maître de moi comme de l'univers; / Je le suis, je veux l'être.
> O siècles, ô mémoire, / Conservez à jamais ma dernière victoire[27)]!
> （私はこの世界の主人であると共に自分自身の主人でもある。現にそうだし，そうありたいと願っている。ああ来るべき世紀と後世の記憶に，今私が成し遂げた勝利が永久にとどまらんことを！）

は，マクシムの裏切を知った直後に発せられるだけに，作為的に言われたと思えない。もともと彼には己れの苦悩から解放されたいという願望があり，信じていた者の裏切が三度までも続いた結果，気持ちが一気に高まったと推察できるからである。

結局ナポレオンとランソンの見方を，言わば折衷する立場に立つのが，最も穏当な『シンナ』の解釈ではないかと思われる。たとえば，シンナと会談する段階で既に皇帝の胸中に，条件さえ整えば若者を許してやろうとする気持ちがあったと，仮定してみるのである。それはモンテーニュなどが伝える，リヴィーの忠告を聞いて我が意を得たりと嬉んだ歴史上のオーギュスト像に近づくことでもあろう。ナポレオン同様実際の政治にかかわったラ・ロシュフーコーは，彼一流の心理学を交えながらも，この問題で一応妥当な見解を表明している。

> 〔Je crois〕 que dans la clémence d'Auguste pour Cinna il y eut un désir d'éprouver un remède nouveau, une lassitude de répandre inutilement tant de sang et une crainte des événements à quoi on a plutôt fait de donner le nom de vertu que de faire l'anatomie de tous les replis de cœur.[28)]
> （〔私が思うに〕オーギュストのシンナへの寛恕には，新しい治療法を試してみたい気持ち，無用に多くの血を流すのに疲れたこと，これから起こることへの恐れなどが作用した。しかし人々は心の襞の隅々まで分析するよりも，それに美徳の名を与えた。）

これは実在したオーギュストについて述べたものであるが，クートンが

言う通り，コルネーユの作品も当然念頭にあったと想像できる。

要するに，オーギュストの決断が直接的には繰り返される殺戮への嫌悪から出たにしろ，リヴィーの助言を得て，許すのも罰するのも政治的効果から言えば五分五分の賭であり，それならば今まで実行しなかった方法を試すのも一見識だという判断が，彼の内に生まれていた可能性は大いにある。皇帝には免罪によって，自己救済と政治的効果を両立させる余地が与えられており，実際その機会を利用したと言えよう。

今言った政治的効果とは，謀叛人の心を鎮めることで暗殺の危険を免れ，帝位にあり続けるといった個人的利害を指すだけではない。この結果得られるローマの平和は，すべての人々の安全と幸福にかかわる公的問題である。この点は繰り返し劇中で強調されている。もしオーギュストが倒されたとして，その後に何が起こるか。以前の内乱状態に逆戻りし，ローマは流血の惨事，戦争の悲惨さを味わうだけでないか。これこそ皇帝が，シンナの思い上がりを戒めながら援用した論理であり，[29] シンナ自身が二幕一場のマクシムとの政体比較論争で口にしたところである。[30] さらにこの視点を抜きにしては，オーギュストの寛恕に続いて起こるエミリー，シンナの豹変を理解できない。それは一方が善行を施し，他方が感謝するという私的な和解のレベルを越えた意義を持っている。エミリーは皇帝に言う。

> Le ciel a résolu votre grandeur suprême; / Et pour preuve, Seigneur, je n'en veux que moi-même: / J'ose avec vanité me donner cet éclat, / Puisqu'il change mon cœur, / qu'il veut changer l'État.[31]
>
> (天があなたのこの上もない権勢を定められたのです。陛下，その証拠としては私自身だけで十分です。私は晴れがましくもあえて証言いたします。天が私の心を変えられたとしたら，それはまさしく天が国家の変革を望まれたからだと。)

そして，十六世紀の宗教戦争という内乱の後をうけて，強力な中央集権政策を押し進めるリシュリユーに対する作者の承認の印を，おそらくここに読みとることができよう。平和と秩序は，一市民にとって何ものにも代え難い。シンナやエミリーが表現している封建貴族の心情に共感すべき余地があるにしても，彼らがリシュリユーを倒して何が起こるか。再び私利私欲が錯綜する争乱の巷に戻るだけではないか。そこから十七世紀の現実にあてはめれば起こるはずのない，リシュリユーと封建貴族の和解という時代錯誤的な，しかし，絶対王制の必然性を認めるという意味では，作者の

歴史認識の正しさを証明する結末が描かれたのである。

〔註〕

1) *Examen* de *Cinna*.
2) Cf. Bénichou (Paul), *Morales du Grand Siècle*, Bibliothèque des idées, Gallimard, 1948, p. 108.
3) Cf. Pintard (René), 〈Autour de *Cinna* et de *Polyeucte*〉, -R.H.L.F., juil, 1964, p. 378.
4) Cf. *ibid.*, pp. 378-381. なおパンタールは，書簡にある1642年9月12日の日付についても，手紙中のプーサンや Gabriel Naudé に関する記述からして誤りでないとしている。
5) Cf. *ibid.*, pp. 381-385.
6) Cf. Jasinski (René), 〈Sur *Cinna*〉-Europe, avril-mai 1974, p. 115.
   *Cinna*, Nouveaux Classiques Larousse, 1971, p. 125.
7) *Œuvres de P. Corneille*, Les Grands Ecrivains de la France (Nouvelles Éditions), Hachette, 1862, t. 3, p. 363.
8) Cf. Chevallier (Pierre), *Louis XIII*, Fayard, 1979, pp. 305-311.
9) Cf. *Théâtre complet de Corneille*, Garnier, 1971, t. 1, p. 896.
10) Cf. P. Chevallier, *op. cit.*, p. 312.
11) 戦死の理由は諸説入り乱れて明らかでない。敗軍の兵を深追いして射殺されたとも，それが癖になっていて，兜の面頬を銃身で押し上げた拍子に自爆したとも言われる。(Cf. *ibid.*, pp. 580-581.)。
12) Cf. *ibid.*, pp. 581-582.
   R. Pintard, *op. cit.*, pp. 405-406.
13) コルネーユは，1629年に死亡したフイヤン会修道者総会長 Dom Jean Goulu のラテン語の墓碑銘を書いている。碑の建立者はヴァンドーム公夫妻であった。碑文の製作年は明らかでない。ただし作者がコルネーユと知らぬまま，過去のいきさつから碑文の一節にバルザックが憤るというハプニングが起こる。これを仲裁したシャプランの手紙に42年の日付があるから，製作は多分41年あたりではないかと考えられる（Cf. *Œuvres complètes de Corneille*, Seuil, 1963, p. 849)。また，ヴォルテールは，五作家による『テュイルリー宮の喜劇』合作の際，リシュリユーが，彼の示した三幕のプランを，担当のコルネーユが修正しようとしたので，〈esprit de suite〉を欠くと非難したと述べている。ところで，このかなり詳細にわたるエピソードは，ヴァンドーム家に伝わる話として，セザール・ド・ヴァンドームの孫達に知られていた。そこから1640年以前から，コルネーユとヴァンドーム家の間に相当親しい附合があったという仮説が成り立つ（Cf. Voltaire, *Commentaires sur Corneille II*, dans *Œuvres complètes*, v. 54, The Volraire Foundation, 1975, pp. 42-43)。さらにステグマンは，『テ

オドール」の献辞にある《L.P.C.B.》なる謎の人物も，ヴァンドーム公であろうと推理している（Cf. Stegmann (André), *L' Héroïsme cornélien*, Armand Colin, 1968, t. 1, pp. 46-47)。

14) もちろん，このことはパンタール自身が断っているように，あくまで推測にすぎない（Cf. R. Pintard, *op. cit.*, p. 413)。

15) Cf. *Théâtre complet de Corneille*, Garnier, 1971, t. 1, pp. 903-904.

16) Cf. A. Stegmann, *op. cit.*, p. 28.

17) Cf. *Théâtre complet de Corneille*, Garnier, 1971, t. 1, p. 898.
P. Chevallier, *op. cit.*, p. 575.

18) Cf. R. Pintard, *op. cit.*, p. 408.

19) Cf. A. Stegmann, *op. cit.*, p. 29.

20) Cf. *ibid.*, p. 29.
R. Pintard, *op. cit.*, p. 409.

21) Cf. *Théâtre complet de Corneille*, Garnier, 1971, t. 1, p. 903.

22) Cf. R. Jasinski, *op. cit.*, pp. 119-122.

23) Cité par S. Doubrovsky, *Corneille et la dialectique du héros*, Gallimard, 1963, p. 213.

24) Lanson (Gustave), *Corneille* (4 ième édition), Hachette, 1913, p. 113.

25) *Cinna*, IV, 3, 1209-1210.

26) Voltaire, *op. cit.*, pp. 155-156.

27) *Ginna*, V, 3, 1696-1698.

28) Cité par G. Couton, *Théâtre complet de Corneille*, Garnier, 1971, t. 1, p. 902.

29) Cf. *Cinna*, V, 1, 1534-1540.

30) Cf. *ibid.*, II, 1, 585-590.

31) *Ibid.*, V, 3, 1721-1724.

# *Cinna*

Nobuya MURASE

*Cinna* fut représenté pour la première fois au Théâtre du Marais l'été 1642, à ce que dit R. Pintard dans "*Autour de Cinna et de Poleuycte*".

Pour apprécier la pièce, il ne faut pas oublier qu'il s'agit d'un drame politique: "*S'il est une tragédie parmi celles de Corneille*, dit P. Bénichou, *qu'il soit difficile d'abstraire du temps où elle a été écrite, c'est bien celle-là.*" En effet, Corneille semble s'être inspiré d'événements contemporains. Énumèrons-en quelques-uns: conspiration de Chalais, révolte des Va-Nu-Pieds, révolte de Comte de Soissons, conjuration de Cinq-Mars et de Thou, etc..

De ce point de vue, il n'est pas difficile de deviner qu'il calque la conspiration de Cinna sur celle de certains grands seigneurs contre Richelieu. La fin de la tragédie suggère une réconciliation: les Grands se soumettent au roi, sur la promesse que leurs privilèges seront respectés, ce qui constitue un rêve anachronique qui ne se réalisera jamais au 17$^{e}$ siècle. Mais s'il est quelque chose de correct dans la vision de l'auteur, c'est le fait qu'il se rend compte d'une sorte de nécessité historique qui exige la soumission des Grands au pouvoir royal. Au cas où Richelieu perdrait, une guerre civile et religieuse éclaterait de nouveau, ce qu'il faut éviter à tout prix.

Dans le dénouement, Émilie déclare à Auguste: "*Le ciel a résolu votre grandeur suprême; / Et pour preuve, Seigneur, je n'en veux que moi-même: / J'ose avec vanité me donner cet éclat, / Puisqu'il change mon cœur, qu'il veut changer l'Etat.*" Sans aucun doute, c'est ici que se manifeste le consentiment à la monarchie absolue. Il y a là sans doute une prise de position politique de la part du dramaturge. Le revirement de Cinna et d'Émilie de même que celui d'Auguste ne se comprennent que

du point de vue politique ou historique.